

特別支援学校在校生・卒業生の余暇活動における縦断的事例報告

A longitudinal case report on the leisure activities of special school current students and graduates

井上明浩 (人間科学部・教授)

Akihiro INOUE (Faculty of Human Sciences, Department of Sports Science, Professor)

〈要旨〉

石川県立明和養護学校在校生の課外活動として、昭和59(1984)年駅伝部が創設された。その後同校陸上競技部は、昭和61(1986)年高体連初加盟、県高校総体、高校駅伝等に出場した。創部から約5年後には、高等学校の陸上競技部員との合同練習、県外合宿や始業前の朝練習等々、一般高校生と同様な活動を行っていた。そして同校卒業生を中心とする余暇活動、地域スポーツの受け皿として、平成3(1991)年に春風クラブが創設された。同クラブは、平成7(1995)年に日本陸上競技連盟加盟し、県内一般競技会ではトップレベルの成績を残し、障害者陸上競技では大部分の日本記録を樹立させ、十数人の日本代表選手を輩出した。平成20(2008)年総合型クラブ参入の頃には、障害の有無、年齢、性別を問わないダイバーシティ的な様相を呈していた。これらの活動は、知的障害者陸上競技におけるインクルーシブスポーツの国内初とも言える先駆的取り組みである。

〈キーワード〉

特別支援学校、余暇活動、インクルーシブスポーツ

1 はじめに

昭和60(1985~1988)年代当時、精神薄弱養護学校(現:知的障害特別支援学校)の課外活動における部活動は、週当たりの活動日数、1日当たりの活動時間、対外試合数、合宿回数等、一般中学校、高等学校のそれと比べると活動的であるとは言い難い状況であった。一方一般中学校、高等学校の運動系部活動の組織である中学校体育連盟や高等学校体育連盟(通称:中体連、高体連)は、当然のように存在しているが、養護学校におけるそのような組織は、都道府県によって養護学校体育連盟(通称:養体連)が存在しているところが散見される程度であった。

通常、精神薄弱養護学校の部活動は、週当たり1~2日程度、放課後のおおよそ3時半から4時半当たりの1時間程度が多かったと思われる。しかもほとんどの生徒が、スクールバスでの通学であるため、実質的に部活動に参加できる生徒は、自主通学が可能な生徒である。つまり少数の軽度の知的障害の生徒を対象に、限定的に実施される事がほとんどであった。

そのような状況の中、石川県立明和養護学校は、精神薄弱養護学校としては、昭和62(1986)年におそらく全国的にも先駆的に県高等学校体育連盟に加盟し、以来一般高校生と同じ土俵で県高等学校総合体育大会や同新人戦、全

国高等学校駅伝競走大会県予選会等に継続的に出場し、今に至っている。一般高校生と肩を並べ競技会に出場するためには、相応の練習量が必要となる。創部から約5年後には、ほぼ一般高校生と同様な練習量、対外試合を実践している。

また主に同校及び県内養護学校等の卒業生で組織された春風クラブが、平成3(1991)年から組織化され、平成7(1995)年から日本陸上競技連盟加盟、平成23年から総合型地域スポーツクラブ(以下総合型クラブ)の参入、地域スポーツとして日常的、継続的に活動している。つまりインクルーシブスポーツという用語が使われ始める以前の段階から、部活動、そして地域スポーツを通して、一般高校生、市民と交流していた。

本研究は、1994年サマランカ声明以前から、インクルーシブスポーツを実践していた先駆的な実践を明らかにするものである。主な資料は、同校駅伝部創部者顧問久司光男氏へのインタビュー記録、並びに久司氏が執筆した駅伝部通信誌創刊号からNO31(1986.10~1988.3)及び、筆者が執筆した陸上競技部(駅伝部を改称)、通信誌走春パートII NO1~NO21(1988.4~1989.3)春風創刊号からNO24(1989.4~1990.3)春風パートII創刊号からNO24(1990.4~1991.3)春風パートIII創刊号からNO32(1991.4~

1992.3) 春風パートⅣ創刊号からNO27 (1992.4~1993.3) 春風パートⅤ創刊号からNO27 (1993.4~1994.3) 県高等学校体育連盟年報、活動が掲載された新聞記事およそ200点である。

2 明和養護学校駅伝部誕生

石川県立明和養護学校は、県内初の精神薄弱養護学校として県民の要望と期待を担って、昭和47 (1972) 年に金沢市東山の地、旧石川県立向陽高等学校跡の校舎を仮校舎として創立した。翌47 (1973) 年に高等部設置、50 (1974) 年に現在の校舎が建つ石川県石川郡野々市町 (現：野々市市) 中林4丁目70に移転した (明和二十年誌, 1991)。周囲は田畑に囲まれ、交通量も少なく部活動には適した教育環境に恵まれたところに所在した。昭和60年代当時の学校規模は、小学部80名弱、中学部80名弱、高等部150名強、寄宿舎もあり、教職員数が約200名強在籍する養護学校としては、全国的にもマンモス校として知られていた。

当時の課外活動としての部活動は、スクールバスを利用して通学していない自主通学可能な生徒を対象としていた。つまり少人数の比較的軽度な知的障害の生徒のみを対象としていたため、その種類は大まかに文化部、運動部というようなくりで、その時に集まった生徒の興味関心や教師側の専門性にに応じて内容を適宜実施、対外活動は少なく、期間は5月から10月、時間帯は最大週2日、15時から16時半頃までというような限定的な活動であった。

そのような中、運動部を担当していた久司光男教諭は、自身の専門性を活かし、長距離走を生徒達と行うことが多かった。久司教諭は、昭和58 (1983) 年4月に同校に新任として赴任し、翌59年 (1984) 年10月に駅伝部を創部した。当時の思いを次のように語った。「生徒達と一緒に走っていると、驚くほどの成長ぶりを感じる。しかもそのレベルは、一般の高校生と変わらない程である。養護学校高等部に所属する生徒自身にも、自分達は他の高校生と同じあるいは勝るという自信をつけさせたかった。保護者にもその成長ぶりを見てほしかった。そしてそのことは同じ競技会に出場した高校生達にとってもいい刺激となるであろう。」 (井上, 2017) また久司教諭が発行した駅伝部通信誌走春第4号では「…赴任して以来、一生懸命に走る彼らの姿を見て、なんとか彼らが出場できる大会がないものかと考えていた。春、秋は実習があり、練習が十分にできないと思い、残るは秋の実習後から雪が降る間までの機関にある大会を考え、一人3.5km (学校のグラウンド20周) の距離ということもあって、当時の高等部の先生の理解を得て初参加した。その時は第2部Bのクラスで75チーム中66位の大健闘であった。私も含め、高等部の先生方も何とか完走してほしいというのが当初の願いであったが、それを大幅

に上回る活躍であった。この大会を契機にやればできるという気持ちが、生徒にも先生にも芽生えた。(中略) 一生懸命頑張ることの意義—どの分野においても一生懸命な姿は、無条件に人を感動させます。…それは選手が自分の体を限界まで追い込み、その状態で自分と闘いながらがんばっているからでしょう。私は一生の中で、一度でいいから、自分を追い込む経験があったらいいなと思います。…試合という目標があるから練習に今まで以上の意欲が出るのです。元旦駅伝に生徒が参加するように、ぜひ父兄の方の理解を切望します。—今週の格言：自分が苦しいのではない!自分に甘くなるな! (久司, 1986)

昭和60年代当時、一般高等学校の部活動と比すれば養護学校のそれは限定的かつ閉鎖的であると言えよう。しかし養護学校の体制としてはそれが常識となっていたため、特に対外試合参加は、教師側及び保護者からの理解協力を得るために相当な努力が必要であった。更に一般高等学校関係者や運営側である陸上競技協会側から安全管理上の不安の声が上がったことは想像に難くない。

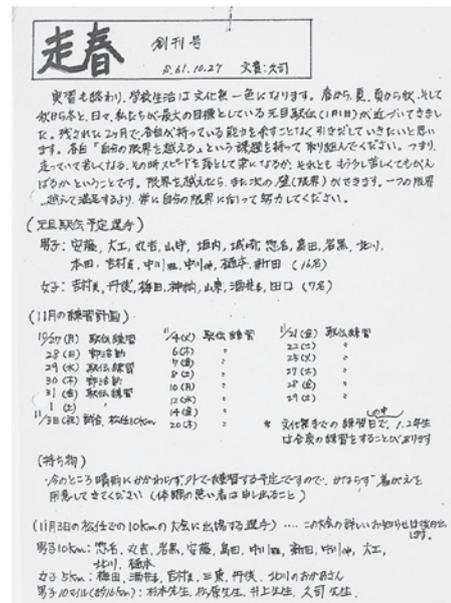


図1：駅伝部通信誌走春創刊号 (1986.10)

3 陸上競技部へ発展と県高等学校体育連盟初加盟

昭和62 (1987) 年、特殊教育当時、メインストリーミングやインテグレーションの理念のもと、幼児教育では統合保育、小・中学校では交流教育が行われてはいたが、高等学校においてそれは皆無に近い状況であった。養護学校生が、高体連に所属し、一般高校生と競技すること自体に安全管理、競技運営上困難であろうという懸念の声が寄せられたことは否めない。しかしながら明和養護学校高等部はそれまでの活動を基盤とし、県高等学校体育連盟に初加盟した。そしてその年の4月29日 (祝) 県高校総体地区予選会に初出場を果たした。そのことは、今で言うところのイン

クルーズスポーツの歴史的第一歩であるということ得意義深い。それから5月下旬の県高校総体、9月中旬の県高校新人戦、11月上旬の全国高等学校駅伝競走大会県予選会に経年出場している。一般高校生と肩を並べ競技会に出場するためには、相応の練習量が必要となる。創部から約5年後には、平日の毎日、そして午後6時頃まで活動時間延長、土曜日または日曜日は近郊高等学校の運動場にてその高等学校の陸上競技部員との合同練習、または陸上競技場での練習あるいは競技会出場、夏季・冬季・春季の長期休業中の平日の練習、及び一般高等学校との県外合宿さらに始業前の朝練習等々、一般高校生と同様な活動を実践していた。また対外試合では、特に高校駅伝出場に関しては、当時、通常小規模な高等学校の生徒数は約600人、大規模校では2,000人を超える中、県高体連加盟55校の高等学校中、高校駅伝にエントリーしてくるのは約20校程度である。この数字を見ても、一般高等学校ですら駅伝にエントリーすることは容易でないことが伺える。一方、当時明和養護学校の高等部の生徒数は約150名その中で部活動対象となる生徒は約50名であったため、数字から見ただけでもその困難さが計り知れる。さらに駅伝競走は、公道を使用して実施されるため、その練習は、校舎内や校庭、運動場、競技場内ではなく、一般道での練習が必要となる。通常の練習以上に生徒の安全管理上より多くの人手や労力、配慮事項が増えるため、出場すること自体に多くのハードルがある。しかしながら、明和養護学校陸上競技部は、昭和62（1986）年から平成6（1994）年まで連続9回出場している。その取り組みは多方面から注目を浴びようになり、平成5（1993）年NHK「ナビゲーション」「暮らしのジャーナル」のテレビ番組にも取り上げられた。⁽¹⁾

明和養護学校生徒の県高校総体、新人戦、全国高校駅伝競走大会県予選会出場は、インクルーズスポーツとしての先駆けとなり、お互いによく知らなかった者同士、正にスポーツを介してのインクルージョンの一端が見られたかのように思われる。最初は不理解やそれからくる偏見からか、養護学校生には絶対に負けられないもし負けそうなら棄権するというような感覚から、彼らが同じ競技会で先頭の優勝選手にどのような差をつけられようとも、必死の形相で苦悶喘ぎながらも、最後まで諦めず、正々堂々と自己の最高の努力を貫きゴールする姿は、同じ競技を志す選手たちには自然と通じたように思える。そればかりか、高校スポーツ界に危惧された勝利至上主義に一石を投じる意味となったと確信する。真のスポーツマンシップとは何か、チャンピオンシップとは何か、真の競技会の意味とは何かを。競技会は、そこに集う競技者全員が正々堂々自己の持てる最高の力を、最後の最後までそれまで積み重ねた練習の成果を遺憾なく発揮する場であり、相手がそうであるか

らこそ、自己の力がその相手によってさらに引き出される言わば、共演の場であるともいえよう。お互いに死力を尽くし戦い終わった後は、そこには勝者も敗者もない、ラグビーのノーサイドは、そのような意味であろう。明和養護学校生の高体連主催大会での活躍は、様々な意味で高校陸上競技界と特殊教育界双方に大きな足跡を残した。



写真1：高校駅伝出場（北國新聞1991.10.31）

一般高校生と同様な練習量を積むようになった生徒の中から、障害者陸上競技界では常に上位にランクされる選手が育つようになった。平成3（1991）年スペシャルオリンピック世界大会・ミネアポリス大会は、陸上競技2名水泳競技1名が日本代表として出場している。陸上競技に出場した東俊明選手は、1500mで銀メダル、西村治美選手は800mで金メダルを獲得、水泳競技に出場した新出幸彦選手は、平泳ぎで銀メダルを獲得している。また翌平成4（1992）年パラリンピック・マドリッド大会に日本選手団代表として陸上競技に中田武弘選手が出場し、準決勝で当時の世界新記録を樹立し、決勝では4位、1500mでも7位入賞を果たしている。さらに平成21（2009）年アジアユースパラ競技会に日本選手団として音信之介が出場し、1500mで銅メダルを獲得している。

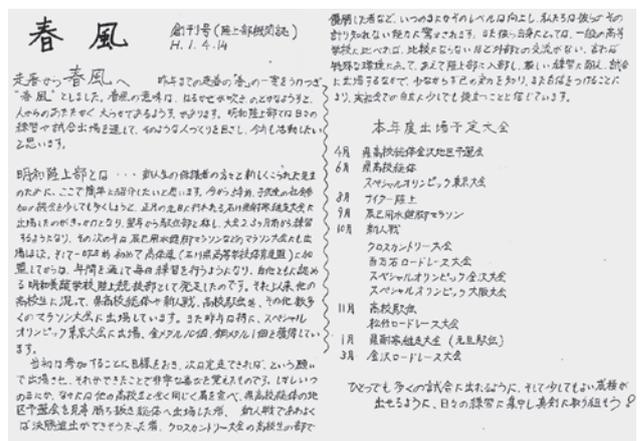


図2：陸上競技部通信誌春風創刊号（1989.4.14）



写真2：国際大会出場（北國新聞1991.7.2）

以上の通り、養護学校生徒は、一般高等学校とほぼ同様な部活動の環境があれば、生徒の競技能力は平均的な高校生と同様なあるいはそれを凌ぐ能力を示すことが事実として明らかにされている。都道府県によっては高等（特別）支援学校が設置されているところは、そのような取り組みが見られるようになってきている。一方で、インクルーシブ教育推進の中、普通教育の中に在籍する特別支援教育対象生徒の部活動対応あるいはそれに代わる対策、また特別支援学校生の重度重複化傾向の中で、依然として部活動の活発化は難しい課題となっている。



写真3：パラリンピック・マドリッド大会
中央 中田武弘選手 左 井上明浩コーチ

4 卒業後の余暇活動の場としての地域クラブ

4-1 精神薄弱養護学校卒業生の生涯スポーツの場としての「春風クラブ」誕生

時代が昭和から平成になり、卒業生が社会人となってから、これまでの運動習慣をどのような形態で継続できるか

が課題となった。この頃は、障害者の生涯スポーツの場はほとんどなく、大都市圏に見られるような障害者スポーツセンター以外に、積極的に障害者を受け入れて定期的に運動ができる場は、いわゆる受け皿は、特に地方においては、皆無に等しい状況であった。

そのような中、平成3（1991）年、数名の卒業生を集め、金沢市宮陸上競技場にて、毎週水曜日、金曜日18：30～20：00の時間帯で、「春風クラブ」というクラブ名で定期的に活動を始めた。当初は、数名の卒業生と指導者（筆者）1名で発足したが、口コミで広がり、クラブ員が増え指導者一人では対応できなくなり、配偶者や友人、親戚、知人に指導あるいは練習パートナーを募り、対応した。その様子を見ていた周囲から、この活動に理解を示し協力を申し出る陸上競技愛好者が集い、指導体制が徐々に整っていった。対外試合については、明和養護学校駅伝部創部当時の目標であった元旦駅伝出場が第1目標となった。つまり元日の早朝に、現役チームである明和養護学校チームとOBOGチームである春風クラブチームが交流するという機会が実現したのである。

4-2 障害者クラブチームとして日本陸上競技連盟に先駆的に加盟

平成7（1995）年、障害者のクラブチームとしては、先駆的に日本陸上競技連盟に団体登録した⁽²⁾。それまでの春風クラブの活動としては、定期的練習活動の発表の機会として、スペシャルオリムピクス、県精神薄弱者スポーツ大会、全国精神薄弱者スポーツ大会（愛称：ゆうあいピック）の参加をはじめ、さらに一般市民が出場できる市民ロードレースを年間10回程度、そして明和養護学校駅伝部創部のきっかけとなった元旦駅伝に出場していた。このような活動を基盤にさらなる上昇志向として、日本陸上競技連盟に団体登録を果たした。その意味は、市民レベルの大会

写真4：日本陸連登録申請書

だけではなく競技者レベルでの競技会出場であり、エリートスポーツにおけるインクルーシブスポーツを意味する。

現在スポーツ庁があり、インクルーシブスポーツが推進される中、昨年2016年4月公益財団法人日本サッカー協会が、一般社団法人日本障がい者サッカー連盟の設立を発表したことが注目されたが、障害者陸上競技界は、一般社団法人日本パラ陸上競技連盟、認定特定非営利活動法人日本ブラインドマラソン協会、特定非営利活動法人日本知的障がい者陸上競技連盟、一般社団法人日本聴覚障害者陸上競技協会の4団体が単独で存在し、統合にはまだ時間がかかるようである。そしてその先の公益財団法人日本陸上競技連盟との傘下加盟も課題となっている。

今を遡ること22年前に単独チームとしてではあるが、春風クラブが日本陸上競技連盟に団体登録したことは意義深い。それはやはり明和養護学校の高体連加盟の実績があればこそその決断であった。無論その実績を持つ卒業生が団体構成員であるからこそ実現したに違いない。その年以降県内の陸上競技者の頂点を決める競技会である県選手権をはじめ国民体育大会予選会、県駅伝競走大会に出場した。特に駅伝競走大会については、日本陸上競技連盟に初加盟以来23年連続23回の出場を誇り、単独チームの連続出場としては、県内屈指のチームとして数えられている。また平成10年の国民体育大会予選会1500mでは第3位となる健闘を見せた。一方市民ロードレースでも活躍は目覚ましく、例年約3000人が集う金沢百万石ロードレースのハーフマラソン陸上競技連盟登録者の部門で第3位となり、県陸上競技協会派遣によるホノルルマラソン招待選手となったこともある。

界知的障害者陸上競技選手権大会に、山下大樹、原田歩の両選手が出場し、原田選手は5000mで銀メダルを獲得、山下選手も400mで7位入賞を果たした。両選手は、翌2000年シドニーパラリンピックにも派遣され、原田選手は1500mで5位入賞を果たした。特に原田選手の活躍は目覚ましく、これ以降も個人の総メダル獲得数では、国内最多メダリストである。その他選手も合わせると、春風クラブから日本代表選手となった選手は16名にのぼる。無論、国内での日本知的障がい者陸上競技選手権大会では、4×400mR前人未到の9連覇達成等、陸上競技トラック種目100mと200mを除く、つまり400m、800m、1500m、5000m、10000m、ハーフマラソン、フルマラソンの日本記録を樹立し、一時代を築いた古豪のクラブチームとして知られる存在である。



写真6：第1回富士山マラソン
第10回日本IDフルマラソン選手権大会 優勝中田武弘選手
左端：日本知的障がい者陸上競技連盟生駒三男理事長
右端：スペシャルオリンピックス日本理事長有森裕子理事長



写真5：国体予選3位（北陸中日新聞1999.8.23）

一方で、明和養護学校陸上競技部がそうであったように、インクルーシブスポーツの効果は、障害者陸上競技の世界では顕著な成果として現れた。平成11（1999）年第2回世

4-3 総合型地域スポーツクラブ加盟

平成7（1995）年から文部科学と日本体育協会が地域スポーツの核として推進してきた総合型地域スポーツクラブ（以下：総合型クラブ）であるが、その趣旨は、人々が、身近な地域でスポーツに親しむことのできる新しいタイプのスポーツクラブで、子どもから高齢者まで（多世代）、様々なスポーツを愛好する人々が（多目的）、初心者からトップレベルまで、それぞれの志向・レベルに合わせて参加できる（多志向）、という特徴を持ち、地域住民により自主的・主体的に運営されるスポーツクラブである（文科省、2017）。当初は全国的に見ても障害者が参加・参画しているケースは稀であった（井上、2009；井上ら、2010）。そうした中、春風クラブは設立当初からスポーツを通してのインクルージョン理念の下、総合型クラブにもいち早く参入しようと考えていた。折しも、かなざわ総合型スポーツクラブ設立のメンバーに知人がいたことをきっかけに同クラブが、平成20（2008）年に創設した当時から参入を果たした。この頃になると、春風クラブ自体が、ダイバーシティ的な様相を呈していた。参加者の障害を有する者

は、知的障害、精神障害、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由（脳性まひ、頸椎・脊椎損傷）内部障害、障害を有していない者は、小学生、中学生、高校生、大学生、退職高齢者、ダイエット目標の主婦、健康志向のジョガー、競技志向のランナー等々様々な市民が集う愛好会となっていた。この活動に理解を示し、協力したいと志すボランティア精神に満ちた大人や学生たちであった。一方で、毎回40名弱の障害を有する選手たちの専門的な練習を把握、管理、指導するには、相応の専門的知識を有する指導者が必要不可欠である。継続的にある一定以上の有資格指導者を確保するうえでも、総合型クラブへの参入は、指導体制に万全を期す目的もある。さらに財政や、広報などの面も、組織的な対応が可能となる。また間接的に法人格を得たことで、補助金の交付も可能となる。このように障害者とボランティアのみで支えられた任意団体としてよりも、法人格を持つ会員規模500名以上で、マネージメントや指導者の専従職員がいる総合型クラブになることは、時代に即応した形

ともいえる。

5 まとめ

本研究をまとめると以下ようになる。

石川県立明和養護学校在校生の課外活動としての駅伝部創設、その後の陸上競技部高体連加盟、各競技会出場、その後同校卒業生を中心とする余暇活動、地域スポーツとしての春風クラブ創設、日本陸上競技連盟加盟、総合型クラブ参入、各競技会参加は、知的障害者陸上競技におけるインクルーシブスポーツの国内初とも言える先駆的取り組みである。

- ・ 明和養護学校駅伝部創部は、昭和59（1984）年
- ・ 同校陸上競技部は、昭和62（1987）年県高体連に初加盟
- ・ 春風クラブ平成3（1991）年に創設され、平成7（1995）年に日本陸上競技連盟加盟、平成23年総合型クラブに参入

注

- (1) 養護学校生が全国高等学校駅伝競走大会県予選会に出場していることは非常に稀なことであった。平成5（1993）年NHK「ナビゲーション」「暮らしのジャーナル」として放映され、非常に反響があった。陸上競技部には、多くの理解、支持や励ましの言葉、寄付が寄せられた。顧問の筆者は、静岡県高校長距離選抜合宿の講演者として招聘された。
- (2) 日本陸上競技連盟団体登録の際には、各選手の氏名、年齢、性別、住所などの記載が必要であるが、障害の有無の記載欄はない。従って、障害者で構成している団体としての把握は、当該連盟としても困難であると思われる。

参考文献

北國新聞. 1991. 7. 2朝刊

北國新聞. 1991.10.31朝刊

北國新聞. 1999. 8.23朝刊

石川県立明和養護学校育友会（1986）昭和61年度育友会員名簿. 文部科学省（online）総合型地域スポーツクラブ育成マニュアル. http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/main3_a7.htm.（参照日：2017年12月12日）

久司光男（1986）元旦駅伝参加の歴史. 走春4. 1986.11.18

久司光男氏インタビュー：駅伝部創設の動機と目的. 201712.19

井上明浩（1989）走春から春風へ. 創刊号. 1989.4.14

井上明浩（2009）総合型地域スポーツクラブへの障害者参加に関する一考察. 第18回日本障害者スポーツ学会プログラム抄録集

井上明浩・池田幸應・神野賢治（2010）大学地域貢献に寄するスポーツ文化発展の方策—地域スポーツへの障害者参加に関する研究. 金沢星稜大学総合研究所年報, 30: 23-31

石川県立明和養護学校二十周年記念誌編集委員会（1991）明和二十年誌. 石川県立明和養護学校校長北橋正治